

## ◎ 連合会だより

労働者協同組合とは何か、または労働者協同組合らしさとは何か、この問いかけにいつも悩みながら活動をしています。

ひとつの答えがICA新原則にあり、いまひとつの答えが私たちの活動の中にあり、そして反面教師としての答えが現在の資本主義企業の中にある、といいながら悩んでいるわけですが、近時、ひとつの核心点が地域というキーワードの中に、またはともにあると考え始めました。

労働者協同組合は人をまるごと視野に入れてきました。高齢者協同組合もその文脈で理解できます。人をまるごと視野に入れるということは、労働者協同組合の組合員は、働く人ということではなく、生活する人でもともと同時に労働者協同組合は、地域で生活する人をも総体として視野に入れているということです。

医療は生活に出会えるかという問題提起、生活

者重視という山際完治さん（東邦学園短期大学教授）の問題提起は、労協は生活に出会えるか、地域と出会えるかという問題提起としても受けとめられる内容であると思います。

新しい仕事おこし、組織の創造という問題を今回の総会で提起しましたが、その根本は人をまるごと深く理解しようとどれだけしているか、人が生活している地域に労協が出会えるかという点に集約されるのではないのでしょうか。地域をひとつの顔として、労協らしさをさらに追求めていきたいと考えています。自治体との新たなパートナーシップ、高齢者就労をはじめとした各種政策的課題の整備・深化もこの生活・地域という視点が欠落するとつまらないものになってしまいます。

生活・労働・地域の再生という大スローガンをあらためて見直しているところです。

鍛谷 宗孝（労協連合会・専務理事）

## ◎ センター事業団だより

冷夏に伴う米不足の大騒動から何年経つだろうか？首都圏での空梅雨模様は、水不足とあわせて、なにやら自然の怒気のように思える。そういえば、長い間「今年は異常気象」という言葉が異常でなくなってきている気がする。異常か異常でないか、怒っているのかいないのか、いずれにしても人間の尺度によるものだ。「社会の再生」をとすれば人間社会だけで考えがちであるが、経済活動であれ、何であれ、物質的なもの以外のものをどう考えるのが、人間の大きな宿題となっているのだろうか。そう考えると、何故人間は生きるのかという根本的な問いがやはり必要ではないか。なぜ生きるのかは何をして生きるのかにも通ずる。

同じ事として、協同組合についても考え直すことが、全世界で意識化してきている。そんな中で、我々は世界に向かって何を発言するのかを、事業的にも組織的にも意識することが、前段の問題意識をより鮮明にしていくことだろう。センター事業団の転機の営みも、少しずつ幕が開き始めた。

新年度第1回となった全国事業所長会議は、それを如実に表した。といっても苦しい幕開けであり、わき上がる雰囲気から遠く、何か意志が一つの方向を定め切れていない雰囲気であった。100名近くとなったこの会議の持ち方の問題、これと連動しているブロック本部長会議やブロックの会議など、「何のために集まっているのか」を位置づけていかないと、お互いが呼応し合うものとなっていく気がする。それを可能にするのは、「今に存在する価値」の見直しを、個人・事業所・全国組織のレベルで鋭く問い合う活動をどう湧き上げていくかだと思う。その責任が幹部・役員に重くのしかかり、また問われている。しかし、その前に「自分」に焦点を当て、問い直そう。これまでとこれからを絡ませ、それを全体にかぶせて…。改革の基本は、人の「思い・実感」と「意志・行動」であることを、全員の合い言葉として。未来の扉を開ける主体になれるか否かの今の中で。

古村 伸宏（センター事業団・事務局長）